

フッサー現象学における「見る」と動機づけ

神田 大輔*

序

マーティン・ジェイは『うつむく眼』第5章の冒頭でエトムント・フッサーに言及している¹⁾。この章では主に、伝統的な視覚中心的思想に対するサルトルとメルロ＝ポンティの批判的な取り組みが論じられているが、そうした取り組みを促したものとして、さまざまなドイツの思想があり、そのなかにフッサーの現象学もあったことが指摘されている。フッサーは一見すると視覚を優位に置く思想に反対しているようにはみえないが、彼の「志向性」や「生活世界」といった概念は、視覚中心主義を乗り越えるためのきっかけになった。そうジェイは述べている。

たしかにフッサーは視覚を優位に置いている。だが、事態はそれほど単純ではないということだろう。本稿では、その点をさらに私なりの仕方であらわにしたい。

以下では、まず、フッサーが「見る (sehen)」ことを重視しているということを確認するが、その後、この言葉がどのような意味を含んでいるのかについて、彼の「動機づけ」という概念との関係から考察する。最終的には、「見る」ということを、パントマイムとの類比から考えたい。

*立命館大学文学部非常勤講師

1. 「見る」こと

『うつむく眼』でも触れられていたように²⁾、フッサールは、理性的な言表の究極的な根拠が「見る」ことにあると考えている。彼は『イデーンI』（第4篇第2章冒頭）で次のように述べている。

ひとが単に対象と言うとき、通常は、それぞれの存在範疇に属している現実的な、すなわち真に存在する対象のことが考えられている。そのとき、対象について何が言われようと——もし理性的に語られているなら——、その際には、考えられているものも言表されているものも、「基礎づけ」られ、「証示」されなければならないのであり、また直接的に「見」られ、あるいは、間接的に「洞察」されうるのでなければならぬ。原理的に言って、論理的な領域、言表の領域においては、「真に存在する」あるいは「現実的に存在する」ということと、「理性的に証示可能である」ということは相関関係にある。(III/1, 314)³⁾

このようにフッサールは「見る」ことの重要性を強調している。何かが現実的であると言えるためには、それは「見」られなければならない。逆に言えば、「見」られていない対象は現実的であるとは言えない。

ただし厳密に言うと、この箇所の「見る」という語は、かなり広い意味で用いられており、眼球を使って物を見ることに限定されているわけではなく、今現実的に存在していると言える対象を知覚する体験全般を指している⁴⁾。だからそれは、視覚だけではなく、聴覚や触覚も含む広い意味を持っている。だが、たとえ広い意味で用いられていても、さまざまな知覚の働きを「見る」という語で言い表しているということは、彼が視覚を中心に考えていたことの証拠であると言えるだろう。

それでは、この「見る」の意味をさらに探っていこう。『イデーンI』のあ

る付論では、「見る」ということ（および「洞察する」こと）には次の二つの意味があると言われる（III/2, 618）。

- (1) 定立の理性性格を動機づけるもの。定立の正当性の根拠としての「正当性根拠」。これがすなわち見ることである。
- (2) 理性性格そのもの。⁵⁾

このとき、この「定立」とは、対象が何らかの仕方では存在するとみなされる意識の働きのことであり、「理性性格」とは、対象が現実に存在するとみなされる場合に、その定立に与えられる性格のことである。ここから、「見る」と「動機づけ (Motivation)」とが密接に関係しているらしいということがわかる。

2. 補完の要求としての動機づけ

動機づけとは、『イデー II』の論述によれば（IV, 211-275）、精神を統制している規則であり、物質的な自然を支配している因果性から区別されるものである。フッサールは動機づけを「理性の動機づけ」（「自我動機づけ」）と、「動機づけとしての連合」（「連合的動機づけ」）の二つに区別する（IV, 220ff.）。前者は、現実的な対象の定立をするように自我を動機づけるものであり、これが今問題になっている理性的な定立に関わる動機づけである。後者は、自我の関与なく生じる任意の種類の種類（例えば感覚の発生）を動機づける。

しかし実際のところ、どちらの場合でも、動機づけとは〈現在の[・]ある[・]部分[・]を、過去に経験された類似の状況によって補うことを求める補完の要求〉であると言うことができる。理性の動機づけにおいては、「類似の部分の存在は類似の補完部分の存在を要求する」（IV, 220）と言われる。それに対し、動

機づけとしての連合においては、「新たに立ち現れる連関は、それが以前の連関の一部に類似したものであるとき、類似性の意味において継続し、以前の連関全体に類似する連関全体へ向けて自らを補完しようとするという傾向」(ibid.)が生じるとされる。

したがって、フッサールの言う「動機づけ」は、この語が通常理解される〈主観を動かして目標へ向かわせる心的過程〉というような意味には収まらない。あらゆるものが現在の状況を補完するように動機づけられるのであれば、類似の状況の中に含まれるさまざまな種類のものが、主観的なものであれ、客観的なものであれ、互いに促し合うことになる。

3. ありありと現出すること

それでは、先に述べた「定立の理性性格を動機づけるもの」に戻ろう。『イデーニ』では明確に、事物が「ありありと現出すること (Leibhaft-Erscheinen)」が、そのような定立を動機づけると言われている (III/1, 316)。この *leibhaft* とは (文字通りには「身体 (Leib) を伴って」という意味になるが)、対象が間接的ではなく、直接的にそれ自体として現れていることを表す表現である。

注意しなければならないのは、この「現出すること」は客観的な事物の世界の中で起こる出来事ではないということである。むしろこれは、その事物を意識する主観の内部で起こっていることである。フッサールがとくに念頭に置いているのは、意識の中に現在生じている感覚と、それを統一的に解釈する意識の働きのことのようなのである。

われわれが知覚を行っているとき、様々な感覚内容が意識に現れ、それらが統一的に解釈されて (統握 *Auffassung*)、それらに対応するものとして何らかの事物が意識される。ただし、意識の内部ではなく、意識の外部に、である。すなわち、それぞれの感覚は、意識の外にある対象についての感覚

として捉えられることになる。したがって、このとき、単に意識内部のことだけが問題になっているのではない。フッサールはつねに、意識内部と、その外部に意識されている事物との切り離せない関係、すなわち志向性を考えている⁶⁾。

だが、感覚が何らかの仕方で解釈され、意識が事物を志向しても、まだ、その事物が現実存在しているということにはならない。それに加えてさらに、理性的な定立が行なわれなければならない。その定立を動機づけるものが「ありありとした現出」であり、「見る」ことであるとフッサールは言っているわけである。しかし、理性的な定立はどのように動機づけられるのか。

4. 蠟人形館の例

理性的な定立の動機づけとはどのようなものを際立たせてくれる例がある。フッサールが何度か用いている、蠟人形館に置かれた蠟人形の知覚の例である。

蠟人形館を散策しているとき、われわれは階段の上で愛想よくこちらにウィンクしてくる見知らぬ婦人に出会う——これは誰もが知っている蠟人形館での戯れである。われわれを一瞬欺いたのは人形だ。われわれがこの欺きのなかに囚われているあいだ、われわれは、何らかの他の知覚と同様に、知覚をしている。われわれは人形ではなく、婦人を見ているのである。しかし、われわれがその欺きに気づいたなら、事態は反転し、今度は一人の婦人を表している人形を見ることになる。(XIX/1, 458f.)

蠟人形館では、目の前にあるものが人間なのか、それとも人形なのかという疑念が生じる瞬間がある。その際、意識に現れている感覚内容は同じもの

だが、複数の解釈と定立が動機づけられる。私が受け取っている色や形の感覚は、人間についての感覚としても、人形についての感覚としても解釈することができる。そうなるどちらとも決めがたい。

このような場合、それぞれの解釈を動機づける力が拮抗し、膠着状態にあるのだとフッサールは言う。「両者のうちのどちらも、疑いの間は抹消されず、その際それらは相互の対立のうちにあり、どちらもある種の力を持ち、どちらもそれまでの知覚の状況とその志向的内実によって動機づけられ、いわば要求されている」(XI, 34)。

だが、一方の動機づけの力を強める感覚が現れたとき、その状態は終わる。例えば、より近くに近づいたとき、肉と血ではなく、蠟に対応すると解釈できる感覚が現れるなら、それは人間ではなく、人形だったということがわかる、というように。

したがって、複数の有力な解釈が対立しているかぎりはまだ、現実的な対象の存在を定立することはできないが、ある圧倒的な動機づけの力が生じたなら、われわれはそこに現実的な対象が存在していると思うように促されることになる。すなわち、他を排除するほどの圧倒的な動機づけの力が生じているとき、理性的な定立は動機づけられると言えらる⁷⁾。

5. パントマイム

フッサール自身が挙げている例ではないが、こうした複数の動機づけの重なり合いを示す例として、パントマイムを挙げることができる⁸⁾。パントマイムと呼ばれる無言劇では通常、役者の身体運動によって、不在のものがあたかもそこに存在するかのように表現される。例えば、役者が「壁」をパントマイムで表現するとき、観客は、実際にはそこに壁がないことを知りつつも、役者の手の動きによって、あたかもそこに壁があるように感じる。観客はこうした存在と不在の動機づけの重なり合いを楽しむ。これもまた、誰も

が知っている戯れだろう。もちろんこの場合、決して壁の現実的な存在の定立は動機づけられない。われわれはふつう、それが虚構のものであることを確信している。

しかしおそらく、極めて巧妙なパントマイムと現実の知覚をはっきりと分けるのは難しい。もし熟練したパントマイムの役者が蠟人形館の中で人形のふりをしていたら、多くの人が騙されるだろう。

そもそもパントマイムは、補完的な動機づけをうまく利用した表現技法であると言える。単純化して言えば、例えば〈AならばB〉という連関が（様々な差異を伴いつつも）繰り返し経験されている場合に、もしその部分Aが意識に現れるならば、その連関全体を補完するもの、すなわちBの要求が生じることになる⁹⁾。パントマイムの役者が〈壁がそこに存在すればするであろう身体運動〉をするならば、たとえそこに壁はなくとも、そこに壁の存在を要求する動機づけが生じることになる。

パントマイムに限らず、どのような種類の表現もこうした補完的な動機づけを利用している。婦人を「表している」蠟人形も、〈人間が存在するならば、これこれしかじかの仕方で見れる〉という具体的な連関の全体のうち、一部だけを表面的に模倣することによって、残りの部分をわれわれに補完させている。

だがさらに言えば、当然ながら、現実的な対象についての経験もつねに、補完的な動機づけを利用している。われわれが感覚的な知覚を行うとき、知覚の対象はつねに面的にのみ現われ、その全体は一挙に経験されない。直接に経験できるのはつねにその一部だけであり、残りの部分は「地平」として経験される。フッサールの考えでは、何かが現実的であると言えるためには、それは「見」られなければならないが、一部が「見」られているなら、「見」られていない部分も、パントマイムのようにその現実的な存在が要求されると言えるだろう。

結

以上、フッサールの言う「見る」がどのようなものなのかについて考察してきたが、その結果明らかになったのは、パントマイムのような、存在を補完的に動機づける働きだった。動機づけが〈現在のある部分を、過去に経験された類似の状況によって補うことを求める補完の要求〉なのであれば、かつて経験された類似の状況の中に含まれる、さまざまな領域に属するものが互いに要求し合うことになるだろう。そこには視覚的なものだけではなく、それ以外のあらゆるものがあるはずである。動機づけという観点からフッサールの「見る」を見たとき、そのような多様な相互要求が見えてくるように思われる。

註

- 1) Martin Jay, *Downcast Eyes: the Denigration of Vision in Twentieth-Century French Thought*, University of California Press, 1993, pp. 263-268. [邦訳、マーティン・ジェイ『うつむく眼——二〇世紀フランス思想における視覚の失墜』亀井大輔・神田大輔・青柳雅文・佐藤勇一・小林琢自・田邊正俊訳、法政大学出版局、2017年、232-236頁]
- 2) *Ibid.*, p. 267. [邦訳、234頁]
- 3) フッサール全集 (*Husserliana: Edmund Husserl Gesammelte Werke*, Nijhoff / Kluwer / Springer) への参照は、ローマ数字の巻数とアラビア数字のページ数で行う。
- 4) フッサールはここで (III/1, 314)、体験を大きく二つに区別し、それぞれを「最も広い意味での」「[知覚し]「見る」作用」と、「[知覚し]ない作用」と言っている。III/1, 43も参照。
- 5) しかし、さらに三つめとして「理性定立とその理性定立を本質的に動機づけるものとの統一」も挙げられている。これは別の箇所 (III/1, 316) で「明証」を表す表現として言われたものである。
- 6) 注意しなければならないが、志向性とは、あらかじめ別々に存在している意識と事物が後から結びつけられるような関係ではない。むしろ、まず、それらの切り離すことのできない関係が成立する。ジェイは、フッサールが志向性という概念によって、見る主観と見られる対象のあいだの距離を縮めたことを指摘していた。Jay, *Downcast Eyes*, p. 268. [邦訳、235頁]
- 7) 一般的に言って、われわれが普通に日常生活を行っているときでも、このような複数

の動機づけの力はつねに生じているだろう。あるときにはある力が優勢になり、別のときには別の力が優勢になりという仕方、われわれは世界から様々な（場合によっては互いに相容れない）要求をこらえ、それに応えて生きている。

- 8) この文脈とは直接関係はないが、ディーター・ローマーは言語を用いないコミュニケーションとしてのパントマイムについて、現象学的な考察を行っている。Dieter Lohmar, *Denken ohne Sprache: Phänomenologie des nicht-sprachlichen Denkens bei Menschen und Tier im Licht der Evolutionsforschung*, Primatologie und Neurologie, Springer, 2016, S. 136-138.
- 9) もし B が現れるなら、A の要求が生じるだろう。このとき、いわゆる「後件肯定の虚偽」は問題にならない。動機づけが全体を補完する要求である以上、〈A ならば B〉は〈B ならば A〉に容易に反転する。

